北海道医報
ISSN 0913-0217　2025.10.1. 第1285号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX(011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

7月5日のデマは何をもたらしたか

情報広報部副部長　寺本（てらもと）　瑞絵（みずえ）

「2025年7月5日に日本で大災害が起きる」という〝予言〟がSNSを駆けめぐった。気象庁は「地震の日時・場所・規模を特定する予知は現代科学では不可能で、うわさはデマである」と公的に否定したが、うわさは収まらず、香港からの旅行キャンセルが相次いだ。結果として大災害は起こらなかったものの、航空各社は減便や運休に踏み切り、インバウンド消費の機会損失は数百億円から数千億円とも言われ、経済的波紋は現実となった。

なぜ根拠の乏しい言説がここまで広がったのか。地震に対する潜在的不安の上に具体的な日付が付加されたこと、過去に「当たった」とされる話が権威付けされ、不確実な確率情報が〝確定未来〟に読み替えられたこと、香港・台湾・韓国など海外からの拡散が相乗したことが大きい。さらに、否定報道とともにうわさの広がりの実相を報じたメディアの言及そのものが、話題の〝正当性〟を補強する形で拡散を後押しした側面も否めない。

フェイクニュースは、その新奇性ゆえに人々の感情を揺さぶりやすい。誰もが情報を発信・拡散できるようになり、私たちを取り巻く情報環境は激変した。一方で、真偽が不明な情報も多い。生の情報が新たな視点をもたらすという良い側面を認めつつも、いま求められるのは一人ひとりの情報的健康、すなわち、確からしさを吟味し、主体的に取捨選択する力である。

先日、テレビで活躍する医療コメンテーターとの会話で「当たり前で正しいことをテレビで話しても採用されにくい。視聴者の心に響く、少しセンセーショナルな内容が求められる」と指摘された。〝強い物語〟は〝もっとも正しい事実〟より速く広がる。現場の実感として、否定しがたい。

今夏の参議院選挙では、物価高騰・家計支援、財政規律と社会保障などが争点化した。与党は議席を減らし、政権運営の再設計が迫られている。争点の一つであった社会保障費は、他の政策を圧迫する〝予算の重し〟として悪者に見立てられた。現役世代の可処分所得を守るという訴求のもと「社会保険料を下げる改革」が前面化し、「給付の崖」「負担の議論は避けられない」といった見出しが危機感を増幅した。さらに、低価値医療の除外やOTC類似薬の保険適用見直しなどの改革案が、医療費＝削減対象というイメージを強めた。「社会保障費の実質的な伸びを高齢化分に抑える」という骨太の方針に沿った説明が反復され、歳出改革の主標的として社会保障が前景化したことで、医療・介護は〝悪者〟に見えやすい環境が整ってしまった。

しかし、社会保障は私たちの暮らしを24時間支える見えないインフラであり、国民の安心を支える社会の共通基盤である。救急が回り、NICUが動き、在宅診療や訪問看護が切れ目なくつながる、これは国民皆保険が機能しているからだ。経済がどう変動しても、社会で相互扶助する装置の維持管理費こそ、私たちが呼ぶ「社会保障費」にあたる。

ただし、この〝器〟の制約は医療の公定価格（診療報酬）に直結しており、物価・賃金上昇を価格に転嫁しにくい構造を生む。社会保障費が「削る対象」として語られすぎれば、医療提供体制の持続性を損なわれる恐れがある。

現に、2024年度の病院経営調査では医業赤字の病院が69％、経常赤字が61・2％。病床利用率は上がっても、光熱費や委託費、人件費の伸びが収益を上回り、増収減益という姿が広く観察された。「値上げできない」医療価格の硬直性は、現場の持続性を蝕んでいる。

選挙後の今こそ、現場の一医師としては、社会保障と医療提供体制の安定を最優先とし、物価・賃金の上昇を公定価格に反映する仕組み、診療報酬と時限的支援の両輪による下支え、国民皆保険を損なわない患者負担設計を基本線として共有したい。社会保障を〝悪者〟にして数字だけを削るのではなく、費用対効果と提供体制の質を両立させる設計こそが必要であろう。

〝予言〟の夏は、強い物語の拡散と、それに揺れる経済・政治を私たちに見せた。そして、当たり前に受けている恩恵は過小評価されがちで、面白みがなく、伝わりにくい現実がある。数字は物語ほど響かない。しかし、日々積み上げる統計や現場の知見や声は、制度を動かす力となる。次の参議院選挙まで残り三年を切った。今、我々にできることを一歩ずつ今日から始めたい。